

<日本語教育能力検定試験 過去問>

(北野 教授法 PPT 第3章 該当問題)

2024.1.12 北野麻由

令和3年度 試験Ⅲ

問題 1 次の文章を読み、下の問い（問1～5）に答えよ。

音声指導には様々な方法がある。時代を追って見ていくと、1930年代頃に起こったアメリカ構造主義言語学^Aは様々な教授法の理論的背景となっている。その一つであるオーディオ・リンガル法による音声指導の方法として、ミニマルペア^B練習があり、現在でも教室活動として広く行われている。また、1960年代頃からヨーロッパの外国語教育に取り入れられた音声の教授法として「VT法」^C（Verbo-Tonal Method）が挙げられる。VT法は、「言語聴覚論」を背景とし、日本語教育においても方法論として取り入れられた。

実際の指導の際には、このような音声指導の方法だけでなく、日本語の音韻の特徴^Dや学習者の母語の音韻の特徴を知っておく必要がある。近年では、音声の自律的学習能力を高めることを目的とし、「自己モニター」^Eを利用した音声教育も広く行われるようになっていく。

問 1 文章中の下線部A「アメリカ構造主義言語学」に関する記述として最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 人間には様々な認知的機能と同様に言語を獲得する機能が備わっていると考える。
- 2 言語は、知覚、カテゴリー化、記憶などの認知能力に動機づけられて成立していると考えられる。
- 3 未知の言語に対し、当該言語の音声をもっと単位まで分析し、体系化を行う。
- 4 言語を歴史的に比較することによって、言語の系統関係を明らかにする。

問2 文章中の下線部B「ミニマルペア」の例として最も適当なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 「個体」と「広大」
- 2 「悪い」と「わりー」
- 3 「行ったの」と「行かなかったよ」
- 4 「知らない」と「死なない」

問3 文章中の下線部C「VT法」による音声指導の例として最も適当なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 身ぶりを付けながらわらべ歌を唱えさせ、拍感覚を意識しながら発音させる。
- 2 ティーチャー・トークにより、学習者にとって分かりやすい発音でモデルを示す。
- 3 音声分析ソフトを使い、モデル音声のイントネーションを視覚的に提示する。
- 4 模範となる音を示し、カラーチャートを用いて学習者に発話を促す。

問題10 次の文章を読み、下の問い（問1～5）に答えよ。

第二言語習得は学習者の情意要因の影響を受けると考えられている。この考えは情意フィルター仮説^Aとして知られている。また、第二言語学習において生じるネガティブな感情は第二言語不安^Bと呼ばれる。

学習者の情意要因に配慮して開発された教授法にコミュニティ・ランゲージ・ラーニング^Cがある。ジャーナル・アプローチ^Dも、第二言語不安を軽減する方法の一つとして知られている。これらを踏まえて、教師は学習者の不安を軽減するような授業運営^Eをすることが望ましい。

問1 文章中の下線部A「情意フィルター仮説」の説明として最も適当なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 第二言語の習得に対する心理的な抵抗感が強まるとインプットの取り込みが妨げられるという考え方
- 2 現在の言語レベルよりも少し高いレベルのインプットを受けることで習得が進むという考え方
- 3 対話する相手と意味のある言語的交流を持つことで第二言語が効率的に習得されるという考え方
- 4 学んでいる言語が使われている社会の一員になりたいという気持ちが学習動機を高めるという考え方

問3 文章中の下線部C「コミュニティ・ランゲージ・ラーニング」に関する記述として最も適当なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 教師は学習者をリラックスさせ、音楽や絵画などの芸術的要素を取り入れる。
- 2 教師は学びの調整者となり、学習者の記憶を助ける特別な教具を使用する。
- 3 教師は目標言語の発話が困難な学習者の隣で、学習者が母語で言った内容を通訳してささやく。
- 4 教師は異文化理解や異文化交流の要素を取り入れ、十分なインプットを学習者に与える。

問題10 次の文章を読み、下の問い（問1～5）に答えよ。

第二言語習得は時間をかけて複雑な過程をたどる。その過程は第一言語習得とよく似たU字型のカーブで表される。

A 習得過程については、クラッシェン（S. D. Krashen）により自然習得順序仮説が提唱されている。このほか、習得には一定の発達段階があるという考え方もあり、日本語の発達段階に応じて産出される言語構造も明らかになってきた。習得過程では学習者は仮説検証を繰り返しており、その影響は言語転移として産出に現れることがある。

最近、学習者コーパスが一般公開されるようになった。これを活用して習得過程にある学習者の言語の実態を把握し、指導につなげることが教師には期待される。

問2 文章中の下線部B「自然習得順序仮説」に関する記述として最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 母語にかかわらず、教えられた順序で文法項目が習得される。
- 2 年齢にかかわらず、教えられた順序で文法項目が習得される。
- 3 学習環境にかかわらず、決まった順序で文法項目が習得される。
- 4 インプットの有無にかかわらず、決まった順序で文法項目が習得される。

問題6 次の資料を読み、下の問い（問1～5）に答えよ。＜資料＞は授業の概要である。

＜資料＞ 授業の概要

学 習 者	CEFR B1レベル <u>A</u>
<u>到達目標</u> <u>B</u>	・旅行先で、お勧めの場所や店などの詳しい情報について質問することができる。 ・自分が住んでいる町のお勧めの場所や店などに関する質問に対して答えることができる。
必 要 な 言葉や表現	・初対面の人に話しかけるとき言葉や表現 ・相手に何かを尋ねるとき言葉や表現 ・理由を述べる時の言葉や表現（例：お勧めの場所の説明）
授業の流れ	① <u>ウォーミングアップ</u> <u>C</u> ② モデル会話を聞く ③ 表現や文型の確認 ④ <u>モデル会話のシャドーイング</u> <u>D</u> ⑤ 会話のペア練習 ⑥ <u>ロールプレイ</u> <u>E</u>

問2 ＜資料＞の下線部B「到達目標」を達成するために必要な「社会言語能力」として最も適当なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 初対面の人と話すときのルールを理解し、場面に適した表現を使う能力
- 2 初対面の人に尋ねて得た情報が理解できなかったときに、聞き返す能力
- 3 初対面の人に理由を述べるときに、順序立てて話を進める能力
- 4 初対面の人理解できるように、正確な表現で尋ねる能力

問題12 次の文章を読み、下の問い（問1～5）に答えよ。

言語使用の捉え方には様々な立場がある。例えば、人類学者のマリノフスキー (B. Malinowski) は、言葉を使うことは (ア) であり、意味は (イ) において解釈されると主張した。

この主張を受け、ハイムズ (D. Hymes) は、文化人類学の立場から コミュニケーションの仕組み を明らかにしようとした。その中でコミュニケーションにおけるスピーチ・イベントを分析し、その構成要素として、場面状況、媒体、調子などを提案した。スピーチ・イベントには、ナラティブも含まれる。

このような流れを受けて、カナル&スウェイン (M. Canale & M. Swain) はコミュニケーションに必要な社会言語能力を提示し、言語教育で重視されるようになった。

問5 文章中の下線部D「社会言語能力」の説明として最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 音韻や統語などの言語体系を習得し、それによって言語を運用する能力
- 2 談話全体の一貫性や結束性を理解し、適切に言語を使用する能力
- 3 会話に問題が生じたとき、会話相手に適切な援助を求める能力
- 4 会話相手との関係や発話の丁寧さの度合いを理解し、表現する能力

問題 4 次の文章を読み、下の問い（問1～5）に答えよ。

外国語教授法は、時代の社会的な要請、言語理論や言語学習理論の展開などを背景に、変遷を重ねてきた。19世紀のヨーロッパでは文法訳読法^Aが主流であったが、19世紀後半にはそれに代わる教授法が台頭してきた。その一つが直接法^Bで、文法は帰納的に教えられた。1950年代にはアメリカで第二言語教育へのニーズが高まり、オーディオ・リンガル・メソッドが開発された。しかし、その後批判されるようになり、1970年代以降、様々な教授法が提唱された。その代表格がコミュニカティブ・アプローチ^Cである。その他、ナチュ^Dラル・アプローチなども提唱されている。1990年代には、タスク中心の教授法^E（Task-Based Language Teaching）が注目されるようになった。こうした教授法の歴史を知ることは、教師自身の言語観や言語学習観を考えるうえで役に立つ。

※下線部Dナチュラルアプローチ 問4は難問で、良問ではないと判断したため、カット

問2 文章中の下線部Bに関して、文法の教え方として最も適当なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 多くの目標言語の実例に接してから、そこに現れた文法規則を発見させる。
- 2 媒介語で文法規則を説明してから、その文法を使ってロールプレイをさせる。
- 3 目標言語で文法規則を提示し、そこから文型の使い方を確認させる。
- 4 媒介語で書かれた解説書で文法規則を予習させ、クラスでは反復練習を行う。

問3 文章中の下線部C「コミュニカティブ・アプローチ」に関する記述として最も適当なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 言語形式や構造より文脈における言語の機能や意味を重視する。
- 2 やり取りの流暢さより母語話者並みの正確な発音を重視する。
- 3 母語の使用を禁止し、目標言語のみで練習するほうが効果的と考える。
- 4 自己訂正させるより、教師が間違いを訂正するほうが効果的と考える。

問5) 文章中の下線部E「タスク中心の教授法」の活動例として最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 グループで無人島生活の必需品のリストを作成し、優先順位をつけさせる。
- 2 「窓を開けてください」などの指示を出し、実際にその動作を行わせる。
- 3 教師が用意したドラマの役を割り当て、台本の読み合わせをさせる。
- 4 「ことができますか」という言語形式の練習を行った後、インタビューをさせる。

問題11 次の文章を読み、下の問い（問1～5）に答えよ。

1960年代から、学習者が産出する誤用の分析が行われてきた。誤用分析が発展するにつれて、過剰般化などの誤用だけでなく、正用も含めた学習者の産出を分析する必要性が指摘されるようになった。

近年では、学習者に対するフィードバックの研究が行われている。誘導 (elicitation) は口頭フィードバックの一つである。フィードバックにはその場で口頭で行うものだけでなく、作文添削など時間をかけて口頭以外で行われるフィードバックも含まれる。

フィードバックを重視する考え方にはフォーカス・オン・フォームがある。タスク中心の教授法 (Task-Based Language Teaching) はこの考え方を取り入れて開発されたものである。

教師は成功したフィードバックだけでなく、うまくいかなかったものについても振り返る必要がある。

問4 文章中の下線部D「フォーカス・オン・フォーム」の方法として最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 母語で学習者の理解を確認しつつ、言語形式の誤りは文法用語を用いて説明する。
- 2 自然な流れの中で学習者の注意を言語形式に向けつつ、コミュニケーションを行う。
- 3 学習者の注意を言語形式に集中させ、体系的に文法項目を整理して指導する。
- 4 学習者の注意を言語形式に向けるのではなく、言語の意味を重視して考えさせる。

問題 6 次の文章を読み、下の問い（問1～5）に答えよ。

外国語教育の教授法は時代によって変化する。オーディオ・リンガル・メソッド、コミュニケーション・アプローチを経て、1980年代にはアメリカで内容重視の指導法（CBI）^Aが体系化された。その流れを受け、カナダではイマージョン教育が生まれ、成果を上げた。^B

内容を重視した方法には、ほかに1990年代にヨーロッパで生まれた内容言語統合型学習（CLIL）がある。その特徴は、Content（内容）、Communication（言語知識・言語使用）、Cognition（思考）、(ア) という四つの概念（4C）に沿って、計画的に内容・方法・教材を検討し、実施する点にある。また、CLILでは、スキャフォールディングなど六つの特徴の下に、指導法が具体的に示されている。^Cそのほかに、コミュニケーション重視の流れを受けて提唱されたタスク中心の教授法（TBLT）^Dもある。

※問1、4、5は答えに迷う選択肢なので省略

問3 文章中の (ア) に入れるのに最も適当なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 Citizenship/Culture（市民性・異文化理解）
- 2 Community/Culture（協学・異文化理解）
- 3 Comparison/Culture（比較・異文化理解）
- 4 Criticism/Culture（批判・異文化理解）